

かゆいところに手が届く！ —多摩・島しょ自治体お役立ち情報—

「かゆいところに手が届く！多摩・島しょ自治体お役立ち情報」は、市町村の職員が日頃の業務で感じている疑問や他の自治体、民間企業などの動向、今さら聞けない行政用語など、知りたいと考えている事項について自治調査会が調査し、問題点や課題などを明らかにすることを目的に実施しています。

市町村の事業にアートを活かす

調査部研究員 石井 史

1. はじめに～「アート」は身近にある～

市町村にとって、アートつまり文化芸術に関する事業は文化担当部署や文化施設が担当し、また、その施設の運営は財団等に委託されていることも多いでしょう。したがって、市町村職員の皆さんが業務でアートに関わる機会は極めて少ないと思われるがちです。個人的にその分野に興味がある人ならともかく、そうでなければ、自分の仕事にも生活にもアートは遠いもの、と思うかもしれません。

しかしアートは、美術館に展示されているものもあれば、街の中に何気なく存在するものもあります。またアートの中のデザインという側面に注目すると、ごく身近に溢れていることが



◀【写真1】
路面の消火栓蓋
(武蔵野市境南町)

わかります。例えば、橋の欄干にその地域の風物がデザインされていたり、マンホール等の蓋に絵が描かれていたりするのを目にしたことはありませんか(写真1)。また、業務の中でイベントの宣伝用のチラシを、イラストやロゴ、色彩などのデザインを工夫して作ったことはありませんか。そして、事業の種類に拘らず、子どもの絵画作品の募集や展示などを通して事業

へ親しみをもってもらうのは、よく行われる手法です。このように、身近なところや普段の仕事に、アートやその一分野といえるデザインが関係することが多くあります。

また、住民の作品による「アートフェスティバル」というものが広く行われています。「アート」という言葉は必ずしも「アーティストが創造した作品」のみを指すことなく、近年では、その作成過程なども含む広い意味で使われています。アーティストの側から社会に関わろうとしているという動きとも相まって、アートを通じた様々な地域活動は、人々の交流を生み出す成果をあげています。

そこでこの稿では、アートという言葉を広い意味でとらえたうえで、アートの多様な場面での活用やその効果について紹介します。そして、市町村の課題や事業にアートをどのように活用できるのか、その可能性を考えていきます。

2. アートの活用事例とその効果

(1) 街の景観づくり

①案内サインでわかりやすさを実現

街や建築の案内サイン(交通標識や非常口の表示など)は、目立つべきものは目立ち、一見してわかりやすく、伝えるべきことを伝えるという役割を果たすことが求められます。ここにデザインというアートの一分野の力が役立っています。

②マンホールの蓋で魅力や情報発信

足下を見てみると、マンホールの蓋には文字だけでなく絵が刻印されているものがあることに気がつきます。電気・ガスなど自治体管理外のものも多いのですが、下水道のように自治体管理のものもあります。これらには、その自治体の木や花、鳥などのシンボルや観光ポイントなどが描かれていることが多いようです。

このことに興味を持ち、市内のマンホールを調べて歩いた中学生がいます(平成26年度(第18回)「多摩市身のまわりの環境地図作品展」)。必ずしも要るわけではない絵がそこに描かれていることによって、地域の魅力や情報を発信しているのはもちろん、街のインフラへの興味を惹くことにもなったのです。

③アート作品で街に面白味を追加

立川市の「ファーレ立川」地区にある、100を超える作品群の中には、車止めや換気口などを作品としたものがあります(写真2～4)。



▶【写真2】
「無題」
車止め
グイット・アコンチ(米)



◀【写真3】換気口
「最後の買い物」
タン・ダ・ウ
(シンガポール)
※外観



▶【写真4】
※作品内部の換気口

これらは、必ずしもアート作品でなくても構わないものです。しかし、道端の何気ない物体や「建物の裏側」感を漂わせるものが、アートになることで、元の機能はそのままでありながら、街の景観への印象が大きく変わります。こ

れが観光資源になることもあります。たとえそうでなくとも、人々が暮らす場の景観を、楽しいものにしてくれます。筆者がこの地区を訪れたときも、それぞれのアート作品は、写真を撮る人、作品のベンチに座る親子連れやカップルなど、人々に楽しまれていました。

④動く壁画で明るい地下通路を実現

取手市では、地下通路の空きスペースに市民の作品展示ギャラリーと「動く壁画」発表の場がつくられました(写真5、6)。

【写真5】▶
通路の壁面に映写



◀【写真6】
市民の作品展示
ギャラリー

駅の東西をつなぐ通路に市民の作品展示ギャラリーが設置され、その横では24時間継続して様々な、時には市民も登場する映像が壁面に映写されています。通路のスペースの有効活用と共に、暗さも逆に活かそうという、アーティストの持つ自由で多様な発想の力によるものです。

(2) 住民参加の喚起

①作家も子どもも共に参加

福島県会津若松市内で開かれるイベント「あいづまちなかアートプロジェクト」では、期間中、市が所蔵する土地ゆかりの作家の作品を街の各店舗で身近に鑑賞できます。これは住民が地域の魅力を再発見し郷土への愛着を育むという効果があります。

それと並び、「路地裏美術展」では、路地にある掲示板に高校生や幼稚園児の作品を掲示しています(次ページ写真7)。これを通して、住民の間では会津というまちに暮らす(暮らした)人同士という一体感が生まれると考えられます。